

# ダニエル書 - ナンバー20

ダニエル書と黙示録：王国の興亡を織りなす予言を解き明かす

Jeff Pippenger

2023-12-15

ホワイト夫人はしばしば、理解すべき預言的な教訓が諸王国の興亡を通して描かれていることを指摘している。

「ダニエル書と黙示録に明らかに示されている諸国の興亡から、私たちは、外面的で世俗的な栄光がいかに無価値であるかを学ぶ必要がある。バビロンは、その後この世界が二度と目にしなかったような権勢と壮麗さ-当時の人々にはきわめて確固として永続するかに見えたその権勢と壮麗さ-を備えていたが、なんと完全に過ぎ去ってしまったことか！『草の花』のように、それは滅び去ったのである（ヤコブ1:10）。同様にメド・ペルシャの王国、そしてギリシアとローマの諸王国も滅び去った。そして、神を基としないものはすべて同じように滅びる。神のご計画に結びつき、その御性質を表すものだけが存続しうる。この世界が知る真に不動のものは、ただ神の原則のみである。」『預言者と王』548ページ。

ダニエル書と黙示録に描かれている諸王国の「興亡」は、予言研究に正しく取り組むうえでの焦点である。バビロンの没落は、創世記11章におけるニムロデのバベルの崩壊によって予型として示されている。さらにダニエル書5章では、バビロンは再び陥落する。ローマ教皇制が538年に権力を握り、その後1798年に没落したという歴史も、最終的なバビロンの没落を予型化している。というのも、教皇権は預言において霊的バビロンだからである。教皇制は1798年に倒れ、黙示録18章はその最終的な没落の概要を示している。ダニエル書11章45節では、そこで北の王として表されている教皇制が、助ける者もなくその終わりに至る。これは恩恵期間が終わるときに起こる。というのは、11章45節と12章1節は同じ歴史を表しているからである。

彼は栄光の聖なる山において、海と海の間とその宮の天幕を張る。しかし、彼はその終わりに至り、彼を助ける者はひとりもない。その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が成って以来、その時までかつてなかったような苦難の時が来る。その時、あなたの民は救い出される。すなわち、書に記されていると見いだされる者は皆。ダニエル書 11:45、12:1。

第二の天使のメッセージは、バビロンが二度倒れたという事実に基づいている。ニムロドとベルシャツアルに代表される文字どおりのバビロンは二度倒れ、霊的バビロンは1798年に倒れ、そして人類の猶予期間が閉じられるときに再び倒れる。

また、別の天使が続いて来て、こう言った。「大いなる都バビロンは倒れた、倒れた。彼女はその不品行による怒りのぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませたからである。」黙示録 14:8。

第二の天使におけるバビロンの倒壊の繰り返しは、聖書に見られる語句の重複を、第二の天使と真夜中の叫びの結合したメッセージの象徴と見なすための預言的根拠を与える。

またそれは、ダニエル書と黙示録に描かれた諸王国の興亡に基づいて預言を研究すべきだという、ホワイト夫人が示した原則を支持する。さらに、バビロンの倒壊を理解するには、預言の学徒は最終的なバビロンの倒壊に関する正しい預言的メッセージを確立するために、バビロンの倒壊のすべての出来事を「行に行を重ねて」結び合わせなければならないという概念を示している。

第二の天使のメッセージにおいてバビロンが二度倒れるということは、真理は二人の証人の証言によって確立されるとする預言の原則に基づいている。メッセージにおけるバビロンの倒壊の二重化は、聖書で「後の雨」と呼ばれる預言の方法論を表している。すなわち後の雨であるその聖なる方法論とは、さまざまな預言の筋を「線に線を重ねる」かたちで結び合わせる適用である。この方法論が預言を研究する者によって用いられるとき、「後の雨」のメッセージが確立される。その聖なる方法論の適用によって確立された後の雨のメッセージは、その後、第二の天使と真夜中の叫びの結合された預言的歴史の中で宣べ伝えられる。これは第一の天使の運動の歴史においてもそうであり、そして今日、第三の天使の運動の歴史においても同様である。

ダニエル書の第4章と第5章は、バビロンの台頭と始まり（第4章ではネブカドネツアルによって表される）、そしてバビロンの没落と終焉（第5章ではベルシャツアルによって表される）を扱う歴史の流れを表している。これらは合わせて一つの預言的な流れを形作っている。これら二つの章によって生み出されるその預言的な流れは、後の雨のメッセージを確立するために、ダニエル書第1章から第3章に重ね合わせられるべきである。

この二つの章は、ネブカドネザルの失墜と回復、そしてベルシャツアルの没落と滅亡を示しており、したがって、その流れの初めと終わりにおいてバビロンの陥落を示している。これら二つの章によって形作られる預言の流れは、バビロンが倒れ、立ち上がり、そして再び倒れるという構造になっている。この事実だけでも、これら二つの章が第二の天使のメッセージを表していることがわかる。この二つの章は、黙示録十三章の地の獣の歴史を表しており、その歴史の中で第二の天使のメッセージと真夜中の叫びが二度宣べ伝えられる。

したがって、ダニエル書の第4章と第5章の考察を始める前に、まず後の雨と呼ばれる聖なる方法論を明らかにし、その方法論を用いて後の雨のメッセージを明らかにする。

第一と第二の天使の歴史における重要な道しるべは、ウィリアム・ミラーの預言解釈の規則によって示された方法論であった。これらの規則は、人々が真夜中の叫びのメッセージを識別するために用いられ、そのメッセージはその時代に対する後の雨のメッセージであった。第三の天使の歴史における重要な道しるべは、「預言の鍵」として示される方法論である。これらの規則はウィリアム・ミラーの規則と併せて用いられ、現在の歴史における真夜中の叫びのメッセージを識別するためのものであり、いまそれらの規則によって確立されつつあるメッセージは、終わりの時の後の雨のメッセージである。ミラーの規則は、地の獣の預言的歴史における初雨を表し、その規則が「預言の鍵」と結び合わされることによって、地の獣の預言的歴史における後の雨を表す。

後の雨とは、メッセージを生み出すために採用される方法論である。まず、その経験を生み出すメッセージを求めることなく、後の雨の経験だけを求めるがゆえに欺かれている

者たちがいる。キリスト教のペンテコステ派諸教会は、その欺きの明白な一例である。同じ種類の誤った方向づけは、後の雨のメッセージ自体は求めながらも、そのメッセージを識別し確立する方法論を求めることを拒む者たちにも及ぶ。正しい方法論がなければ、正しいメッセージを見極めることはできない。正しいメッセージがなければ、正しい経験は不可能である。

この聖書的事実の重要性は大半の人に認識されていない。彼らは、聖書の学び方にはただ一つの正しい道があり、また多くの誤った道があるという可能性を考えたことがないからである。圧倒的に多く選ばれている聖書の誤った学び方は、聖書が何を教えているかについて他人の意見に頼ることだ。これは人々の間であまりにも一般的な問題であるため、どの教会も、自分たちの群れが抱くこの誤って認識された「必要」に対処するための仕組みを整える。この偽りの必要は、聖書理解の霊的専門家と見なされる指導者の制度を打ち立て、訓練されていない群れの理解を正しく導くのだとされる、その偽りの働きを生み出す。聖書は確かに、長老や預言者、教師を含む、教会の構造に関する非常に整った制度を示している。しかし聖書は、何が真理であり何が真理でないか、ひいては誰が異端者であり誰が異端者でないかを定める権限を授けられた指導者の制度を生み出すような、教会組織の腐敗を決して是認していない。

神に認められた者として自分を示すよう努め、恥じる必要のない働き人として、真理の言葉を正しく扱いなさい。テモテへの第二の手紙 2:15。

教会の指導者は、勧め、戒め、教え、誤った教理とそれを広める者たちに対して警戒しななければならないが、私たち一人ひとりも、「真理のことばを正しく取り扱う」ことによって、「神に認められた者であることを自ら示すように努める」べきである。そのためには、聖書が「真理のことばを正しく取り扱う」ための正しい方法として示している方法論を知っていなければならない。イザヤ書は、これらの問題を「後の雨」の文脈で示しているので、私たちはそこから始める。

その日、主は、その厳しく大いなる強い剣をもって、刺す蛇であるレビヤタン、すなわち曲がりくねる蛇であるレビヤタンを罰し、海にいる竜を打ち殺される。

その日、これに向かって歌え——「赤ぶどう酒のぶどう畑」と。私、主がそれを守る。私は絶えずそれに水をやり、誰かがそれを傷つけないよう、昼も夜も見張って守る。怒りは私の内にはない。誰が私に向かって戦いに、茨と棘を差し向けるだろうか。私はそれらを突き抜け、ひとまとめに焼き払う。むしろ、彼が私の力をとらえて、私と和睦するがよい。そうすれば、彼は私と和睦するであろう。彼はヤコブから出る者たちに根を張らせ、イスラエルは花咲き芽ぐみ、その実で全地の面を満たす。彼を討った者たちを討たれたのと同じしかたで、彼は討たれたのか。彼が殺した者たちの殺され方と同じしかたで、彼は殺されたのか。量を定めて、それが伸び出すとき、あなたはそれと論じる。彼は東風の日に、その荒い風をとどめる。このことによってヤコブの不義は清められ、彼の罪を取り除くすべての実りはこれである——彼が祭壇のすべての石を、打ち砕かれた白亜の石のようにするとき、木立や像はもはや立たない。しかし、城塞のある町は荒れ果て、住まいは捨てられ、荒野のように残される。そこでは子牛が草を食み、そこに伏して、その枝を食い尽くす。その枝々が枯れると、それらは折り取られ、女たちが来てそれに火をつける。彼らは悟りのない民だからである。それゆえ、彼らを造った方は彼らをあわれまず、彼らを形作った方は彼らに恵みを示され

ない。その日、主は大河の流れの水路からエジプトの流れに至るまで打ち落とし、イスラエルの子らよ、あなたがたは一人ひとり集められる。その日、大いなるラッパが吹き鳴らされ、アッシリアの地で滅びかけていた者たち、エジプトの地の追われた者たちが来て、エルサレムの聖なる山で主を礼拝する。イザヤ書 27:1-13。

これまでの記事で、神のほかの子らをバビロンから呼び出すために掲げられる「旗じるし」について繰り返し取り上げてきた。イザヤ書二十七章の最後の節は、「大いなるラッパが吹き鳴らされ、アッシリアの地で滅びに瀕していた者たちが来る」と述べ、その旗じるしの働きに言及している。アッシリアは終わりの時におけるバビロンの象徴であり、この節の「バビロンから出よ」という警告のメッセージを聞く者たちは、「エルサレムの聖なる山」にいと預言で示されている十四万四千人を表す者たちとともに来て礼拝する。

その節には「その日にそれが起こる」とある。「その日」とは、黙示録第18章の第二の声は神のほかの子らをバビロンから呼び出す日のことで、章全体の背景となっている。黙示録第18章の第二の声は、ツロの淫婦が思い起こされる日曜法のときに叫ぶ。

また、天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女のもとから出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女に下る災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。」黙示録 18:4, 5。

イザヤ書第27章は、章の終わりでも語られる同じ日を、次のように示すことから始まる。「その日、主はご自分の厳しく大いなる強い剣をもって、突き刺す蛇であるレビヤタン、すなわち曲がりくねった蛇であるレビヤタンを罰し、海にいる竜を打ち殺す。」

日曜法の時、神の執行的で報復的な裁きが、竜（国際連合）、獣（教皇権）、偽預言者（アメリカ合衆国）という王国に下り始める。日曜法において、聖書予言における第六の王国である偽預言者は打ち倒され、国家的背教は国家的破滅をもたらす。日曜法こそが、サタンである竜（その地上の王国は竜として表されている）と、獣、そして偽預言者の上に神の執行的裁きが下り始める時点である。それは日曜法から始まる段階的な刑罰である。イザヤ書27章の冒頭と結末は日曜法を示しており、この章は、日曜法に至る歴史とその後に続く歴史に直接結びつく特定の事柄を表している。

私たちは第27章を検討しています。というのも、それが第28章と第29章のための予言的な枠組みを確立しているからです。これらの章では、「後の雨」を一つの方法論として定義していることを見いだすことになり、その結果、ダニエル書第1章から第3章の上にダニエル書第4章と第5章を重ね合わせることの意義を理解できるようになります。イザヤ書第27章が竜の王国に対する漸進的な懲罰の始まりを明らかにした後、彼はその時期に、神の民が「彼女に向かって歌え」と命じられていることを記しています。誰に向かって歌うのですか？

歌が誰に向けて歌われるのかという答えは、その歌の題名にある。というのも、彼らは「主が守っておられる赤ぶどう酒のぶどう園」を歌うからである。ぶどう園の物語は神の民の物語であり、それについてはイザヤ書第5章で初めて言及される。

さて、わたしは愛する者のために、そのぶどう畑について、わが愛する者の歌を歌おう。わたしの愛する者は、きわめて肥沃な丘にぶどう畑を持っていた。彼はそれを垣で囲い、石を取り除き、最良のぶどうの木を植え、そのただ中に塔を建て、さらにその中にぶどう踏み場を作った。彼は良いぶどうが実るのを待ち望んだが、実ったのは野ぶどうであった。今、エルサレムの住民よ、ユダの人々よ、どうか、わたしとわたしのぶどう畑との間を裁いてください。わたしのぶどう畑のために、わたしがしなかったことで、なお何がしえただろうか。どうして、わたしが良いぶどうを待ち望んだのに、野ぶどうを实らせたのか。さあ今、わたしがわたしのぶどう畑に何をしようとしているかを告げよう。わたしはその垣を取り除く。するとそれは食い荒らされる。わたしはその石垣を打ち壊す。するとそれは踏みにじられる。わたしはそれを荒れ果てさせる。刈り込まれることも掘り起こされることもなく、むしろ茨と棘が生い茂る。わたしは雲にも命じて、その上に雨を降らせない。万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家、ユダの人々は主の喜びとする植え木である。主はさばきを望まれたが、見よ、圧政。義を望まれたが、見よ、叫び。イザヤ書 5:1-5。

日曜法の危機の歴史において、神の民は神の民に向かって「ぶどう園の歌」を歌うのである。というのも、その歌はこう語っているからである。「今や、エルサレムの住民よ、ユダの人々よ、どうか私と私のぶどう園との間を裁いてください。」ぶどう園の歌は、かつての契約の民が退けられ、神が、ペテロが「かつては民でなかったが、今は神の民である」と言う者たちと契約に入られる間に、それが起こっていることを示す歌である。それは、ぶどう園に雨が降っていないことを示し、ゆえに、その時期に来て、その時期ただ一人雨を降らせることのできるエリヤの働きを明らかにする。私たちは、この歌が契約の民が退けられることについての歌であると知っている。というのも、ぶどう園の歌は、古代イスラエルが退けられつつあった時期に、キリストが古代イスラエルに向けて歌ったものであり、同時に神は霊的イスラエルと契約に入っておられたからである。

「もう一つ、たとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、その周りを生け垣で囲い、その中に酒ぶねを掘り、見張り塔を建てて、それを農夫たちに貸し与え、遠い国へ旅に出た。やがて実りの時が近づくと、主人は実を受け取らせようとして、しもべたちを農夫のところへやった。ところが農夫たちはそのしもべたちを捕らえ、一人は打ちたたき、もう一人は殺し、さらにもう一人は石で打った。再び、最初のときよりも多くのしもべたちを遣わしたが、彼らはその者たちにも同じようにした。最後に、彼は『わたしの子なら敬うだろう』と言って、息子を彼らのもとに遣わした。ところが農夫たちはその子を見ると、互いに言った、『これは相続人だ。さあ、殺して、その相続財産を自分たちのものにしよう。』彼らは彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して、殺した。さて、ぶどう園の主人が来たら、その農夫たちをどうするだろうか。」彼らは言った、「その悪人どもをみじめに滅ぼし、ぶどう園を季節ごとに実を納めるほかの農夫たちに貸すでしょう。」イエスは彼らに言われた、「あなたがたは聖書に、『建てる者たちが捨てた石が、隅のかしら石となった。これは主のなさったこと、わたしたちの目には不思議なことだ』と書いてあるのを読んだことがないのか。だから、あなたがたに言う。神の国はあなたがたから取り上げられ、その実を結ぶ民に与えられる。この石につまずく者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その者は粉々にされる。」祭司長たちとパリサイ人たちは、このたとえを聞いて、イエスが自分たちのことを言っているのだと悟った。マタイによる福音書 21:33-45。

イエスが古代イスラエルに向けて神のぶどう園の歌を歌われたとき、人々はそのメッセージの論理と力強さに深く引き込まれ、イエスが、あれこれと異議を唱えるユダヤ人たちに、ぶどう園の主は御子を殺した者たちに対して何をするかとお尋ねになったときには、彼らは思わず正しい答えを口にした。「彼はその悪しき者どもを無残に滅ぼし、そのぶどう園をほかの農夫たちに貸すでしょう。彼らはその季節ごとに彼に実を納めるでしょう。」

イエスはそれからただちに、その歌にもう一節を付け加え、棄てられた石について歌い、そして「それゆえ、わたしはあなたがたに言う。神の国はあなたがたから取り上げられ、その実を結ぶ民に与えられるであろう。この石の上に落ちる者は砕かれ、また、この石がだれかの上に落ちるなら、それはその者を粉みじんにするであろう」と述べて、結びの連で彼らの答えをまとめた。「粉みじんにする」という表現は、イザヤ書二十七章の「祭壇のすべての石を、打ち砕かれた白亜の石のようにし、木立と像は立たない」という言葉を想起させる。どちらも、ヨシヤによって行われた復興の業を指しており、ヨシヤは、終わりの日に「七たび」を再発見する者たちを象徴している。それは、それを尊いものと認めることを拒む者たちを打ち砕く、つまずきの石である。

イザヤ書二十七章に示されているように、日曜法の日には、「かつては民でなかった者たち」が、主の赤ぶどう酒のぶどう園の歌を歌うであろう。これらの記事はしばしば、第一と第二のメッセージなしには第三のメッセージは存在しないと指摘してきた。日曜法は第三のメッセージであり、日曜法の日には第一と第二のメッセージの歴史を包含している。イザヤ書二十七章では、日曜法はダニエル書第一章で表されている期間を指し示し、さらにダニエル書第一章から第三章にかけて再びそれを指し示している。預言的には、二十七章における日曜法の日には、第一のメッセージが力を受けた2001年9月11日から、まもなく到来する日曜法に至るまでの歴史を指し示している。

次の記事では、ローマの淫婦が自分の歌を歌い始める時点に至るまでの時期に、贖われた者たちが宣べ伝えるべき歌についての考察を続けます。

そして私は見た。見よ、小羊がシオンの山に立っており、彼とともに十四万四千人がいて、その額には小羊の父の御名が記されていた。私は天からの声を聞いた。それは大水の轟きのようにあり、また大いなる雷鳴の声のようであった。また、琴弾きたちが琴を奏でる声を聞いた。彼らは御座の前で、また四つの生き物と長老たちの前で、まるで新しい歌のようなものを歌った。しかしその歌を学ぶことができたのは、地から贖い出された十四万四千人のほかには誰もいなかった。これらの者は女によって汚されなかった。彼らは童貞である。これらの者は、小羊がどこへ行かれるにも従う者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられる初穂となった。彼らの口には偽りが見いだされず、神の御座の前で傷のない者たちである。黙示録 14:1-5